

医療史

近代の医学と医療2

第5回

診療情報管理士テキスト
診療情報管理 I も参考のこと

20世紀前半の医学(1)

- パブロフ: 条件反射の研究(パブロフの犬)
- ランドスタイナー: 血液型の発見(ABO式)
- 高峰讓吉: アドレナリンの発見(別名エピネフリン)
- ホフマン: 梅毒の病原体(スピロヘータ)の発見
- ワッセルマン: 梅毒血清反応の発見
(江戸時代の患者の大半が梅毒であった時代も)

20世紀前半の医学(2)

- ピルケー: アレルギー説(アレルギーによる過敏反応の説明)
- アショフ: 細網内皮系(脾洞内皮や脾索の細網細胞、肝臓のクッパー細胞、単球、組織球、など)の発見
- スターリング: セクレチン(膵臓からの重炭酸塩の外分泌を亢進させる。酸性を帯びた粥状液が胃から送られてくると分泌)

20世紀前半の医学(3)

- ケンダル:サイロキシンの分離(甲状腺ホルモン)
- 山際勝三郎:コールタールでの人口がん(発がん実験)
- ベスト:インスリンの分離(インスリンは51個のアミノ酸:糖尿病の解明にのちにつながる)
- フレミング:ペニシリンの発見(チャーチルの肺炎の治療)

20世紀後半の特徴

- 医学の分化、専門化
- 専門同士の統合化の必要性
- 心身医学の必要性：科学では解決は不十分
- 医療の概念の拡大（予防、臨床、リハなど：一次、二次、三次医療）

20世紀後半の医療分野

- 化学療法：抗生物質
- ホルモン療法：成長ホルモン、インスリンなど
- アレルギー、免疫学の進歩
- 臓器移植：免疫抑制剤の進歩
- 遺伝子工学：大腸菌に作らせたホルモンなど
- リハビリ、予防医学の進展
- 臨床病理検査
- ME(医用工学)
- 医療情報に関する技術の進歩

化学療法

- ペニシリン発見後の治療の変化
 - 感染症の減少：死因の上位に感染症が占めなくなった
 - 一方、耐性菌や院内感染の問題も
 - 細菌に限らず、ウィルスに対して抗ウィルス剤の用いられている（アシクロビル、タミフル）。

ホルモン療法

- ペプチドホルモン（注射で投与）
 - 成長ホルモン
 - インスリン
 - ACTH
- ステロイド等（経口摂取可能）
 - ステロイド
 - 性ホルモン

臓器移植

- 免疫抑制剤の開発（拒絶反応を抑制）の恩恵
 - 腎臓
 - 心臓
 - 肺
 - 肝臓
 - 膵臓
 - 小腸などの移植が可能となった。

心身医学

- ストレスと身体的症状
 - 過換気症候群
 - パニック障害
 - 神経性の胃腸症状など

ストレスと身体症状との関連に注意

予防医学

- ワクチン(予防接種)
 - 定期接種: DPT、BCG、麻疹、風疹、ポリオなど
 - 任意接種: インフルエンザ、水痘、ムンプス、Hib、肺炎球菌、HPV
- などの予防接種により、様々な疾患が減少傾向

リハビリテーション医学、末期医療

- リハビリ: 障害が生じた後に残った機能を可能な限り回復
 - 脳血管障害、外傷、心臓手術後、肺手術後などPT、OT、STなどの新たな職種の誕生
- 末期医療: 緩和ケア

検査・診断・治療法

- 放射性同位元素：RIAによる微量物質の検査
- 超音波検査、CT、MRI、内視鏡などの画像検査の発達
- レーザー光線による止血、血液成分解析
- ガンマナイフ

医療情報学の発展

- 医療情報の一元管理
- 医療情報の解析
- 電子カルテ
- オーダリング・システム
- レセプト請求オンラインシステム